

災害と語り 悲劇としての津波の記憶表象との分析方法に関する試論

寺田匡宏

Natural Disasters and Narratives

①過去と二重の表出 歴史学がどうして記憶をあつかうのか、そしてそれはどのようにしたら可能なのか

②分析視角 語りに関するいくつかの先行研究とその方法

③災害の語りとは何か 民俗的な語りの後に隠されている語りえないもの

④悲劇としての災厄 人生の語りの中に繰り入れられた災害とそこからみだすもの

⑤悲劇とは何か その機能、その認識を成立させるもの

⑥環境と語り その視座の導入が歴史学に何をもたらすか

【語りの構造】

本稿は、災害という出来事がいかに語られるかを悲劇という枠組みとの対比によつて分析したものである。

災害とは本来は地球が物理的に動くということであつて、意思や意図といったものは存在しない偶然性の世界に属する。しかし、それに遭遇した人はそれを何らかの認識枠組みによつて語らざるをえない。「悲劇」とはそのよつな枠組みの一つであり、本稿は、具体的な語りの分析によつてそれがいかなる形で現れているかを検討した。

まず、第一章では、過去を歴史学的に扱う際の方法を検討し、過去とは直接的にアクセスすることができるものではなく、語りなどの記号表現を通じて、そのごく一部にふれることができるものであることを示した。第二章では、つづいて、民俗学、文化人類学の研究成果をもとに、語りをいまこの出来事として扱う方法について検討した。

第三章と第四章では、具体的に昭和三陸津波の語りの分析を行つた。第三章では、民俗的な炉辺の語り風に語られた津波の語りにおいて、語られなかつた死者の存在が見え隠れしていること、第四章では、人生訓の中に繰り込まれた津波の語りにおいて、そのような語りの中には入りきらない死者が存在することを明らかにした。

以上の分析をもとに第五章では、災害を悲劇としてとらえる人間の認識の構造について精神医学と文化人類学の研究などを援用しながら検討し、災害の語りは悲劇とは微細な部分で異なるものの、強い情動という点では共通するものがあることを示した。最後に第六章で、本稿のテーマである環境と人間という問題と災害との関係について述べた。